



史談会開催日

昭和 50 年 (1975 年) 6 月 4 日

## 対談 ・ 新村 ・ 井関両氏大いに語る 『戦前・戦後の 印刷工業の興亡』

### (1) 震災翌年が業界入りの第一歩でした

#### ■ 語る人

新村 長次郎 氏  
(新村印刷株式会社会長)

井関 良彦 氏  
(大同印刷株式会社代表取締役)

#### ■ 【新村長次郎氏の略歴】・

・明治 25 年 10 月 11 日東京生れ、82 才。大正 4 年、安田銀行に入行、昭和 3 年同行退職、京都帝国印刷会社に入社、東京金谷印刷を経て昭和 6 年新村印刷所を設立、戦時中は小林又七氏と共に、企業整備で買収して機械を半分と資金を出し「小林軍用印刷」を設立するなどした。20 年 5 月までの戦災で、住宅、都内 5 工場、八王子 2 工場など全て焼失、三共株式会社と、安田貯蓄銀行（現協和銀行）に仮事務所を設置するなどして、22 年新村印刷株式会社を復興し、取締役社長に就任、50 年会長に就任して現在に至る。この間、昭和 16 年、日本印刷文化協会東京支部平版分科会委員第二部部长に就任、24 年千代田平版会の再建、また東京印刷協同組合設立、千代田支部顧問に就任、41 年東印工組理事長、全印工連会長、日印工副会長など歴任。現在全印工連顧問、東印工組常任顧問、全印健保常任顧問、日本印刷技術協会会長などの要職にある。

#### ■ 【井関好彦氏の略歴】・

・明治 26 年 9 月 4 日生、満 81 歳。青森県の出身だが、先祖は会津藩士であった。大正 10 年明治大学商学部を卒業し、博友館印刷所（現・共同印刷の前身）に勤務、当時の大橋光吉社長の信頼もあつかった。昭和 7 年頃、神田鎌倉河岸の明治印刷株式会社の常務取締役として経営に当たっていた。昭和 20 年 2 月、印刷業新体制の線に添い、かつ「企業一家」との理念のもとに 8 社合同して大同印刷株式会社を創立、その代表取締役に就任した。この間、日本印刷文化協会神田地区の活版部長として企業整備に協力した。また、文部省の教科書出版資格審査会の審査員や学校法人明治大学評議員など教育関係の公職につき多大の貢献をした。昭和 31 年から日本印刷工業会、東京印刷工業会の専務理事に就任、当時の山田三郎太会長の片腕として活躍した。

#### 井関：

私は元来、東北の人間でして、今でも相当ズーズー弁ですし、歯も欠けてますので、あまり良く喋れない。

私は本当に平凡な人間でして、商売もみんな上手くいかない。というわけで今は何もないんですが、今、こうして半生を振り返ってみますと、たくさんの方々の友情のお陰で現在まで何とかやってこられたという感じがするだけです。

私の家は、もともと会津藩なんです。会津藩というのは福島県の会津若松の藩ですが明治維新の変革で、賊軍にされてしまった。まず、一番不運の籤を引かされた藩だろうと思いますね。孝明天皇さまの御信任を受けて京都守護職に在りながら、徳川方への忠誠から、討幕軍と戦って賊軍の汚名をきせられたのですから。それで、藩主の松平容保公と共に国替えを命ぜられて、たった 3 万石の青森県の北端、斗南に封ぜられてしまった。

私の家も、その運命を辿って、会津若松から青森へ移住したわけです。ですから、父も母も、7 人の子女を育てるには、随分と辛酸をなめたと思います。したがって家が貧しかったから、私は当時学費のかからない県の師範学校に入学した。明治 42 年の春でした。その頃の師範学校の教育というのは、いわゆる硬教育でして、全員を寄宿舎に収容させ、軍隊訓練と同様な教育を受けさせたものです。だから卒業して社会に出ても、生真面目ではあるんですが、融通のきかない無骨者というのが多かった。それで、私は 7 年の義務年限を果たさないで、まあ教育界を後にして上京して、明治大学に入った。もう 25 才になっていましたね。大学は一応卒業したんですが、既に第一次世界大戦も大正 7 年には終局を迎えて、大正 9 年には我が国には大恐慌が起こって、大変な不況になった時でした。

卒業と同時に、海上ビル4階に事務所のあった、さる人の同族会社に勤めたんです。そして大正12年9月1日の午前11時58分、遙か遠くから物凄い海鳴りが聞えたと思う間もなく、天地は大激動し、一瞬にして大東京が潰滅するという惨事が起こった。それすなわち関東大震災ですね。私は右往左往の為体で、何等為なこともなく、翌年の夏、その会社を辞めて、ある人の世話で博文館印刷所に入社した。これが、私が印刷に関係した第一歩です。

この博文館印刷所は、大橋一家が経営するものでして、その年（大正14年）の暮れに傍系会社の精美堂印刷と合同して、共同印刷と改称して現在に至っていることをご承知の通りです。この会社は、その当時受注高においては首位であったんですが、その頃第一次世界大戦の末期から起こった自由思潮と相俟って、労働運動が各地に展開されるようになった。大正6年6月大戦の好況下に長崎造船所の従業員が大罷業したのを始め、東京近県にも、野田醤油、浜松楽器、東京帽子等の会社に相次いで相当長期に渉る争議が起こった。共同印刷も日本労働組合評議会出版労働組合に属する2千名の印刷労組員がいて、年と共に経営陣を悩ましたね。特にソ連の労働代表で来訪したヨフェイという人がわざわざ組合本部にあった購買組合博文館共働社と称する組合に立寄り工員の氣勢を揚げた事実もあるんです。そんな有様で毎日のように工場の中庭に集まり赤旗を立て、労働革命歌を声高らかに歌いスクラムを組んで騒ぎまわる有様でした。私の入社した翌年、即ち大正15年1月、遂に共同印刷の大争議が起こった。会社も必死の覚悟で持久戦の方針を立て、強硬に戦うこと3ヵ月に及ぶ長期の争議となったため、どうにか会社側に有利に終局を告げることが出来ました。当時文選工で作家であった徳永直君の小説「太陽のない街」は内容も人も場所も会社そのままの姿でした。



## (2) 大工賃も払えなかった創業時独立に反対した“中西の親父”

新村：

市村（道徳）さんから、話しがありまして、昔のことを喋れという。まあ、80才も過ぎましたし“冥土の土産のつもりで喋ろう”ということです。大分ハッキリしないところもありますが、何か参考になればとお話します。

井関（好彦）さんと私は、明治大学の頃はお互いに大変良く知っ

ていたんですよ。それと、両方とも神田に住んでいたというような関係で、親しくお付き合いはしていましたね。千代田会を作るときも、井関さんと2人で準備をした、というような思い出があります。

私は、浅草の北三筋町で生まれまして、親父というのが鼈甲屋さんです。女の人のお櫛や簪を巣来る鼈甲屋さんですね。それで、今でも覚えているのですが、銀座に吉野家という店がありまして、ウチはそこと関係があったらしい。ウチは「吉忠」という名で商売をしていました。忠というのは私の親父が忠兵衛と言い、そこからとったものです。

それから、本当の私の名は「長谷川長次郎」という名前なんですよ。「新村」というのは姉の嫁ぎ先の家の名でして、その家に子供がないもんで、養子に行って「新村」となった。本当は長谷川長次郎という役者みたいな、良い名前だったんですよ。(笑) 養子に行ったのは、私が8つか9つのときでした。そのようなわけで、小学校も浅草から根岸へと移りました。それから明治の中学へ行ったわけです。

親父は鼈甲屋をしまして、その当時の職人ですね。で、母は、これはちょっと変わってましてね、「葛西の海老伝」と言いまして、一種の侠客の徒なんです。“葛西の伝”とも言いましてね、江戸の草子なんかにも出てくる。私は子供の頃よく遊びに行ったんですが、木刀とか、昔風の煙草盆などが戸棚なんかに入っているのをよく見ました。私の母の話しによりますと、何か口入れ稼業みたいなことをやっていたらしいです。それから明治大学を出て安田銀行に入ったわけですが、ここを辞めたのは、中西（虎之助）の親父から勧められたからです。ザックバランに言うところ中西の親父は自分の娘が可愛いからだったというのが理由ですよ。というのは銀行員ですと、定年で首になる。そうすると喰うに困るというわけです。で、最初は京都の帝国印刷に見習いで預けられた。しかし東京で商売するので、東京にいないといけないということで、本所の金谷印刷という所に1年ちよっといた。そして、昭和6年に神田の三崎町に店を出したのです。

ところが、親父はそうしておきながら、いざ三崎町に店を出すことにどうしても承知しないんです。はっきり言いますと、親父は凸版印刷の常務取締役であり、当時の凸版印刷社長の井上源之丞さんに気兼ねをして自分の身内が独立することに遠慮があったんでしょうね。しかし、私もいつまでもそうやっていても仕方がないので、それを振り切って独立したんですが、これについては悩みました。先



輩なんかにも随分相談しました。ご承知の通り、お金があるわけじゃない。親父の所へ頼みに行っても、承知しないのだから金も出してくれないわけです。もう困りました。土地を買う時にも、月賦で買った。もちろん大工に払う金もない。姉が大分苦心してくれまして、また銀行の先輩も面倒みてくれまして、何とか店を出せたわけです。

その辺のことは倉田さんが、親父の側近というか、大変良く知っている。それから三崎町に店を出したときは中村（正男）さんのお父さんに大変お世話になりました。年は私よりちょっと上でしたね。私は商売が初めてなもんですからいろいろとお話を伺ったわけです。今から考えるとおかしなもんですが、いろいろとお世話になりました。当時ジंक版を磨いてから表にぶら下げておいてよく叱られたもんです。とにかく、私はまったく素人から始めましたから中村さん始めいろいろな方から技術的なことを教えていただきましたね。

### (3) 戦時中個人では設備を一番持っていた

新村：

私が商売を始めた当時、凸版印刷に長谷川さんという人がいて、二長町の工場長をしていた。

私は、印刷のことがわからないもんですから、夜になるとその工場へ行っては話を聞いた。ある時には長谷川さんに来てもらいましたよ。そんなことが何度かありました。

そういった経過を経て、現在に至っているわけですが、その間の私のした社会奉仕というような中で、一番良いことだと思っておりますのは育英会をつ作ったことですね。今まで数百人ばかり卒業していきました。浅草観音新村育英会と言いましたね、もう13年になります。今でも毎月40人にやっていますが、せめてもの、社会への恩返しだと思っています。

印刷組合のことになりますと、私、今でも記憶しているんですが、文化協会の前の同業組合のときだったと思います、井上源之丞さんが理事長だったんですが、新富町の芸者の置屋の見番の2階で総会をやったことがある。文化協会時代より大分前のときでした。それから、もうひとつ覚えているのでは、日清生命のホールで総会の時、東京印刷工業組合のときだと思いますが、今井甚太郎さんと井上さ



んが、舞台の上で大ゲンカをしたことがありました。殴り合いまではいかなかったんですが、相当の喧嘩で私は真下にいて、止めに入ろうかどうかと心配していたの覚えています。今井さんというのは頑固な方でしたね。井上さんも譲らなかった。私はよく杏林舎へ行っただんですが、当時今井さんはよく和服を着て前掛けをしていましたね。

文化協会のときになりますと、まず茅場町の偕楽園という中華料理屋で総会をしたのを覚えています。鈴木正文が専務か何かだったと思います。井関さんが神田地区の活版部会長で、私が平版部会長だったわけです。

例の企業整備のときには、日英社、東洋美術印刷、栄恒社印刷所、京極紙工所及び疎開工場として柴田印刷所、高瀬印刷所など8社ほどの設備を買い入れまして、個人の会社としてはオフセット機を一番多く持っていたと思いますね。会社じゃなくて、個人としてね。その頃まだ新村印刷は会社じゃなかったからです。

それで、私は、はっきり言いますと、小林又七さんの息子というのが、まず長男（勇太郎）が女性問題かなんかで、廃嫡されちゃった。次男は留学に行って、イギリスの女を連れて帰ってくるというようなことでした。三男が竜三といい小林又七を継いだんです。この又七がね、軍の仕事をしているので、ぜひ私にやってくれないかということで、小林又七が社長で私が専務で「小林軍用印刷株式会社」という会社を企業整備で買収した機械を半分と資金を出して作った。何ととっても昭和18・9年の戦争の頃ですから。軍の参謀本部にまで行ったものです。会社はね、今の三宅坂の社会党本部が小林又七さんの会社だったんです。あそこへ私も部屋をもらってまして、小林又七という人は年寄りなもんですから私が実質行っていたわけです。もちろん銀行間係を中心とした仕事は新村印刷でやっていました。小林又七は昔風の人で、赤坂の日枝神社で竜三が立ち合いのもとに親子の盃までとり交わしたほどでしたが、そのうち小林又七も亡くなり、勇太郎が帰ってくると同時に学友の森村という人が入ってきて、何とか一緒にやっ行って行こうとは思っていましたが、話しが合わないの、機械や出資を引上げてやめてしまったんです。1年か1年半ぐらいやりましたが……。結局は自分でやるほうがいいということから、新村印刷1本に専念したわけです。



## あの頃は苦しく、そして楽しかった

### 新村印刷の創業当時のことなど

#### 中村正男氏の証言

##### 夜明け前に女房が練炭を起こしていた

新村さんが仕事をお始めになったときは、奥さんまで手伝わっていたほどで大変だったそうです。

なにしろ新村さんは勉強家ですから朝早くから夜遅くまで、徹夜もたびたびだったと聞いています。さすがに、3日徹夜連続したらダウンしたという話を聞いたことがあります。昼間はずっと外交するわけですが、夜は夜で伝票整理。で、鎌倉の片瀬ですか、ここに家があったときに、氏神様の三崎神社に毎朝必ず参拝して夜、それも大分遅いときですが、そのときも参拝してから帰るという毎日でした。とっても信心家でした。三崎神社にいろいろなものを寄付され、本当に事業は一生懸命やる、信仰は深い、さらに千代田区の社会福祉協議会にも新村基金を贈るなど社会事業にも尽力するというので、立派です。本人は“罪ほろぼし”というようなことを言っていますが（笑い）、とにかく偉大なことだと思いますね。

ひと頃は明神下でもどこでも“天下の新村”と言えば女の子たちが騒いだもんです。遊びもしたし、食べるものも食べたし……男冥利に尽きるというか、一世一代、本当によくおやりになった。

新村 中村さんが開業当時のことをお話しになりましたが、いや、思い出しますねエ。

あのね、当時、冬になってもストーブなんてものはなかった。練炭です。練炭火鉢が工場に切ってあった。朝、暗いうちに起きて、練炭火鉢をウチワであおいで起こす。5つ6つそれでもありましたかね。



工場の者が来るまでに、それを工場内の適当なところに置いて行く。これを私の女房がやっていた。そして私は朝8時になると『毎度こんちは』ということで出掛けてました。もちろん車なんてないから電車ですね。電車に乗って東京中を歩いた。途中で、腹が減ると泥鰻屋に行って1杯4銭の駒形の泥鰻汁を食べたりしてね。

昭和6年頃ですね、独立したのは。確か最初の機械はオフセットの手差しで、菊全の機械を月賦で買った。いくらで買ったか、値段は覚えていない。それと、中西の親父の持ってた四六全判の古い機械を貸してもらった。中西の親父というのは、オフセットの開拓者ですけども、これが専売局に大分関係があって専売局の仕事をすべきところなんです、その中古の機械を貸してくれた。この2台の機械で始めたわけです。

